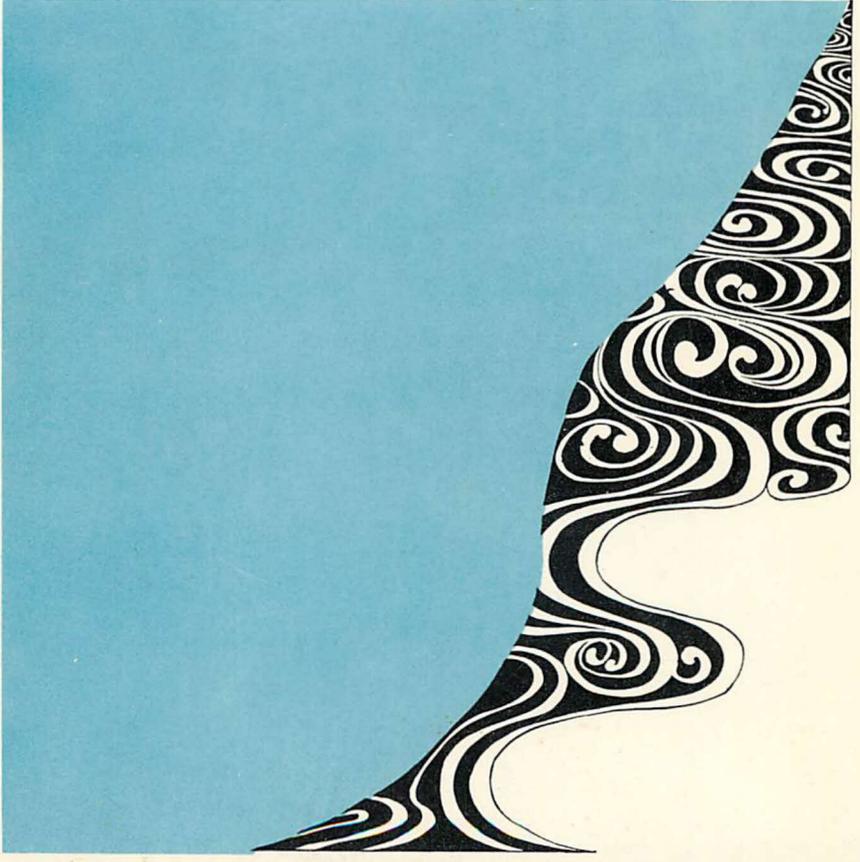


昭和四十八年八月一日発行（毎月一回）日発行

創刊号

8月

陸



1973年

陸

8月号

————— 目 次 —————

霞	1	田川飛旅子
チュパン・アタの丘の上で	2	加藤 楸邨
蕪村余瀝	5	安東 次男
涛声雑記	8	田川飛旅子
新・俳諧一口噺	10	
特別作品 爪織り	11	中村 路子
特別作品 地獄絵師	12	中村 和弘
作品 I	13	
作品 II	20	
陸路集	25	田川飛旅子選
選後評	29	田川飛旅子

表紙・カット 勝木康頤

霞

田川 飛旅子

不治のもの桜の下に殖やし生く

恋終り芝焼いて脚細く見ゆ

日照権より霞を独占せるが憎し

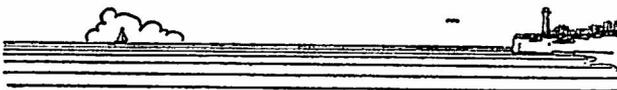
不定愁訴の話春眠のラデオから

天皇も老斑もたす桜かな

放射線に藺を活けて一本先を折る

山野辺三朗氏を悼む

額の花の向うの黄泉^{よみ}へ通夜の径



チュパン・アタの丘の上で



加藤 楸 邨

ビビ・ハヌイムの廃墟の前がタシケント通りで、これを北に向かって進むと、舗装された道はアフラシアブの廃墟に通じている。その右側にある丘がチュパン・アタと呼ばれる小高い丘で、ここにウルグ・ベクの天文台の跡がある。

二十米位の高さの石段を登ると、左右の丈の低いコスモスの花などが手に触れてくる。丘の頂きは東西七、八十米、南北はその倍位ある。登りつめた所ですぐ目につくのは一つの寢墓である。これがソヴィエットの考古学者として知られ、このウルグ・ベクの天文台を発掘したピアトキンの埋葬されている所である。ピアトキンは十七世紀の文献を資料として、ここを発掘した結果、千九百八年、六分儀の下の部分を発見したのであった。

この墓のすぐ左手が天文台の六分儀のある所で、狭い入口から入って中を覗くと、半月形の六分儀の軌跡が斜め下十一米の深さに走っている。幅二米の左右は削られた岩石そのまま、入口からさしこむ光が薄暗く中を浮きあがらせる。溝を挟んだ二本の軌跡はみごとな曲線である。これが、今まであちらこちらで見えてきた遺跡の形とはまったく異った機械的な冷たさを感じさせる。この冷たい感動はそのままウルグ・ベクの生涯の印象にも通ずるようなところがある。

私はサマルカンドに入って、何より興味を覚えたのは英雄チムールではなかった。もちろんチムールにも興味はある。しかし、ウルグ・ベクには、チムールを初め他の英雄たちには感じられない魅力がある。サマルカンド

にかかわりのある英雄たちとはちがった関心というのは、ウルグ・ベクの最期の悲劇もその一つであろう。チムールは、第一の妃で、ビビ・ハヌイムのモスク建設の後援者だったという説もあるサライ・ムリク・ハヌイムから孫ウルグ・ベクの誕生を陣中で報ぜられた。非常に喜んで、彼は征服した都市の貢物を免除したと伝えられている。

こうした祝福の中で生を受けたウルグ・ベクは、幼少の時から頭脳のすぐれた存在だったらしい。チムールの死後、内乱が起った時、父を援けてサマルカンドを手に入れ、その統治を任せられた。それが十五、六歳の若さの時だったが、以来、学問や技術を奨励し、サマルカンドをすぐれた文化の府として育てあげていった。レギスタン広場で見えてきたウルグ・ベクのメドレッセや、この天文台を初めとして、現存する多くの遺跡は、ウルグ・ベクの代に成ったものだといわれている。

父の死後、また内乱が起ったが、これを自分の長子アブド・アル・リヤチフと力を協せて切り抜けた。その後、この長子との間は父子で争わねばならない不幸な運命に見舞われた。その結果、父子はサマルカンドの郊外で戦を交え、ついに父の軍は敗北に終わった。ウルグ・ベクは捕えられて、長子のアブド・アル・リヤチフが命ずるま

またたった一人の供を連れて、メッカ巡礼に旅立ったが、出発するとすぐ子の放った刺客によって斬られたのだった。グル・エミールの廟に祖父チムールと共に納められるのであるウルグ・ベクの頭骸に刀傷が認められるのは、そのためなのである。

ウルグ・ベクのメドレッセは、彼の青年時代のもの、天文台も千四百二十八年の建設であるから、三十代の半ばに造られたもので、ウルグ・ベクは自ら哲学や天文学を講じたという。当時ウルグ・ベクの遺した観測表は、今調べてみてもかなり精密なもので、後世の天文学者をして、天文学史上最も偉大な観測者であるといわしめる位だそうである。それほどの科学的才能を持ち、多くの文化的業績を挙げ、自ら哲学や天文学の講義をしたという文化的にはすぐれた王者が何故父子相討の末、このような悲惨な末路を持たなければならなかったのか、これはここを訪れ、ウルグ・ベクの天文台を見学する人々の胸を去来する大きな疑問であろう。

文化的才能は充分持っていたが、王者としての政治的能力に欠けるところがあったために、このような悲惨を招いたのだと言ってしまえば、一応図式的な解釈はつくかもしれない。だが、そうしてみても納得できないものが残ることも確かである。今からは想像の困難な事情が

累積し、いろいろと絡みあった紛糾の末こうした結末に到達したものであろうが、一つの手がかりになるかもしれないと考えられるのは、ピアトキンによってこの天文台の発掘されたとき、記録にあるようなタイル裝飾の三層の天文台の建物はすっかり破壊されてしまっていてあとかたもなく、六分儀自体も五十七度以下だけしか残されていかなかったというのであろう。これは単なる戦による破壊ともちがうようである。この冷静な理性にもとづく科学的なゆき方に不安を覚えて、徹底した反撥に出た宗教的なものが底にひそんでいる破壊だったのではなからうか。イスラム教の狂熱的な信徒にとつてウルグ・ベクの冷静な理性は、神を冒瀆する許しがたいものであったに相違ないし、それが政治上の権力と結びついたところにこうした悲劇的な結末が招来されたものである。

地下の六分儀の壙から外へ出てみると、空は底抜けに青かった。チュバン・アタの丘の下には私共の来た道が、多分楡の木と思われる青々とした並木を伴って北へ走り、はるかにタシケントの方に向かっている。

道を挟んで彼方に限りなくひろがる荒廃した褐色の原は、アフラシアブの丘である。このアフラシアブの丘こそ往年のサマルカンドの廢墟の眠っていた地であり、古い歴史に登場するソグディアナの首都マラカンドの墟なのであった。

はるか地平の方には雲のような西トルキスタンの山脈が連なり、見るかぎりの褐色の土は一本の木の緑をも許していない。古くは水道管によってセラフシヤンの水を引いていたこの古代サマルカンドは、チンギス・ハンの徹底した破壊によって水を失った時、その命を断たれた。そしてここから見える遙か左手の低みに、新しいサマルカンドが今のレジスタンのあたりを中心としてチムールの手で建設されたわけである。

今、こうしてチュバン・アタの丘の上に立つてみると、かつてここに立ったウルグ・ベクの天文学の夢、哲学者としての思いが遠く思いやられる。天体のはてもない深さをこの六分儀によって観察しつつ彼が考えたのは、地上の権力争いなどであったはずがない。



蕪村余瀝

安東次男

本のあとがきというものを、いつごろ誰がはじめたのか知らないが、これは書きぐせがつくと始末のわるいものである。私のばあいは、思うに青年のころ生活の資を得るため、それに外国語習得の一助にもなると考えて、いくばくかの翻訳をやったことがあって、これは解説ふうなあとがきをつけぬわけにはゆかない。その辺のくせが、いまだに続いているらしい。あとがきを書きながら、いつもばかばかしいと思う。一本を書き了えて、あるいはまとめたえて、まだ書きたりぬことがあれば、それは新たに筆を下して一文を書けばよいので、ほっとしたとか多少の感慨がないでもないというようなことを、

いくら書いてみてもはじめられないのである。結局、あとがきというものは、既に発表した文についてその初出の雑誌なり発表年月日を書き留めておくとか、編集者の誰れさんに世話になったとか以外には、書くべきことのないものだろう。そういう私事を書きつらねるのは、私の性に合わない。前者は、必要があればべつに手控えてもつくっておけばよいし、誰かに世話になったというようなことは、これは文末に一行書き加えて済ませるようなことではないだろう。といいながら、又しては書く。その気持は吾ながら量りがたいが、まんざら厭だとはかき思っているわけではなく、本文中に書き尽せなかつた

心の未練を、どこかにしるしとして残しておきたいからだ。思いきりがわるい。しかし、どうやらそこが文事の文事たるゆえんで、私の仕事はこれで終ったわけではないのだということを、弁解が弁解にきこえぬように多少文章の工夫を設けて書いているときが、もの書きはいちばんみじめで哀れなはずであるから、次にまた何かを書く勇氣も湧いてくる。役者ならさしづめ、支度部屋で化粧を落しているとき、そんな気分にならないか。

三年前になるが、筑摩書房の日本詩人選の一冊として「与謝蕪村」を書いたとき、私ははじめて、あとがきを書かなかつた。じつは、この本ほど書きたりない気が動いたこともなかつたので、いっそひと思いにやめてしまったのである。書けば、全部書き改めてみたいというようなことを書くしかなかつたから、これはそういうあとがきがあつてわるいはずはないが、やはりあとがきにはならない。その後誰かがそこに気づいて、「桃李」（モスモモと読む）の詩人の「めぐりよめどもはしなき」円環走行の術中に陥った者の嘆きを読取ってくれないものか、とひそかに心待ちにしているが、いまだに誰もそういうことを言ってくれた人はいない。この本は随分い

ろんな人が過ぎた讃辭を手向けてくれたように覚えてゐるが、そしてそれはそれで私としてはむろんわるい気はないが、心の虚しさは蔽うすべがない。

かりに「春風馬埶曲」をすぐれた古典として読みはじめれば、「溪流石点々、踏石撮香芹、多謝水上石、教儂不沾裙」というような表現は、まったく愚鈍な詩心というしかない。王維の「輞川集」の中には、「清淺白石灘、綠蒲向堪把、家住水東西、浣紗明月下」という王維の詩があり、これに唱和した斐迪の「跛石復臨水、弄波情未極、日下川上寒、浮雲淡無色」という同詠が収められている。晩年の蕪村が輞川詩情に深く傾倒していたことはまちがいないから、先の蕪村の句は、この王維、斐迪の詩のそれぞれ上二句を踏えて作られたことは明かだろうが、「弄波情未極」が「教儂不沾裙」と翻えされたのは、その愚は誰の目にも容易に見抜ける。翻案者の詩心を疑われてもしかたがあるまい。しかし蕪村は、この俗情の正統なるゆえんをちゃんと説明していて、蔽入で親里へ帰省する仇者とたまたま道づれになったので、「女ニ代ツテ意ヲ述ベル」のだと断っている。小娘の俗情を輞川詩情に結びつけたのは、蕪村の詩情の面目であつ

て、蕪村の俗情ではない。「引道具の狂言座元夜半亭と御笑ひ可被下候。実は愚老懐旧のやるかたなきよりうめき出たる実情にて候」と、蕪村は書いてある。この道行の演出はじつにうまい。じつは「馬堤曲」の面白さは、朝川詩情に届くべくして届き得ない卑情をまです点出して、おいて、次第にその卑俗を洗い純化してゆく構想の妙に尽きるのであって、これは一抒情詩人などのよく思いつくところではない。連句の本道に則った俳諧師の俳諧師たる面目がよく現われている。

そういうことを私は、長年「馬堤曲」を読んできたつもりで、「曲」について筆をとって書くまで気づかなかつた。というよりも、当時大学紛争の渦中に置かれていて、学生たちの判断の未熟さに苛立ち、自らの行動の進退について省るところがなかったなら、そのときでもま

だ気がつかなかつたのではないかと思う。このささやかな発見は、私がこれまでに蕪村から得た殆ど唯一のものと言つてよいが、その掘つて来るところを書こうと思えば、私の蕪村論ははじめから筆を改めるしかあるまい。一あとがきなどで済ませることではないのである。私は、じれったさに、ついには丸谷才一や大岡信に向つて、どうせ書評を書いてくれるならせめてその点だけは書いてくれ、と物書きの分を越えたことまでもとめたが、かれらは、本人が種明しをしたものに後矢を射られるか、と言つてわらつた。そして、賞めなくてもいいところをわざわざ探し出して賞めてくれた。友情とは有難いものである。「与謝蕪村」のあとがきは、やはり必要だつたように思う。



濤声雜記

田川 飛旅子

一 「陸」という誌名

このたび創刊した俳誌「陸」の名は「リク」と読む。「クガ」と読ませるのですか、と人からよく聞かれるが、単純に「リク」と読みたい。私はこの誌名を旧約聖書の開巻第一頁、創世紀第一章第十節から得た。「神はそのかわいた地を陸と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神は見て、良しとされた」という所からである。

大漢和辞典によると、陸には「高く平な土地」という意味があると記され、「高平曰陸」という例文が挙げられている。人間の自由平等を尊む私にとって、この平というイメージは有難い。それと、陸こそは、その上で人が生まれ、生涯を生

きぬき、そして葬られゆくところであり、海に比べてドライな所も俳句的で好ましい。私がこれから、その場で会員と共に俳句を学んでゆくに最も適わしい誌名であると信ずる次第である。

二 俳句と人間

今日、俳句はかつてない隆盛の絶頂にあるといわれる。しかしながら、本来一つなるべき俳壇が、十数年来、現代俳句協会と俳人協会の二つに分裂し、その間に何等の交渉もなく、互いに無関係であり、会員も相互にはっきり分断されて、冷たい関係を持っていることは、俳句隆盛の中の悲惨な事実である。二つの協会の合一ないし和解に力を貸そうとい

う人士の一人も俳句の世界に現われぬことも、俳人という人種の不思議な器量の狭さを物語っていると見えよう。

俳句の隆盛、俳誌の氾濫のなかに、私は俳句の極度の技巧化をみてとる。言葉が洗練され、俳句構成のツボがパターン化し、類型的な俳句が世にはびこる。こうした現象を静かに見ていて、私は俳句の隆盛の底に人が何かを忘れて、技巧の末端へ我も我もと殺到している幻想を感じる。

何かが忘れられていないであろうか。常識的な言い草かもしれないが、それは作者である主体の俳句への投入であると思う。私は恩師加藤楸邨に随順し、三十数年になるが、先生が若い時に私どもに教えた「俳句の中に人間を生かそう」という基本理念を信奉し続けて来た。その上に立って、一人一人の人間が、どんな立場にある人でも、自分の生かされている真の意味を知り、良い意味において、自分を大切にし、俳句を通して、それぞれの生の証を立てることが、俳句を作ることの真の意義と考える。他の何人でもない、真にその人自身の持つ力を、俳句表現を通して、探り当てるということが、俳句につながる私共の最初にして、最後の念願でありたいと思う。

もっと突っ込んで言えば、要するに、作者自身の心の傷を、言葉を通して、俳句の中で抑えつつ詠い、自分の魂を鎮めることこそ、俳句制作の意味であると思う。もちろん、私は技巧を全く軽視するものではない。しかし、人間投入とい

う基本に立っての技巧でなくては、本を忘れて、末に走るといわれても仕方なからう。

俳句は言葉が短いので、散文的な説明によって成功するとはならない。俳句は配合の芸術であると思う。五七五の世界で、AとBという異なったイメージが、併置され、ぶつかり合うのである。そのいずれかの中に季語が含まれることが多い。AとBとは即かず、離れずの関係をもつ異質のものが良いとされている。AとBが同質であると、陳腐平凡であり、AとBが余りに異質であると難解となり、読者の共感を得られない。その二つの間に、作者の意図と読者の理解のすれちがう微妙な接点があり、それが詩の誕生点となる。常に新しみを求められる俳句は、その接点を同質から異質の方向に向って、絶えず攻略せられるべきである。

こうした構造を持つ俳句において、作者という人間を投入することは、AまたはBのいずれか、またはその底層に作者自身のいま癒やされねばならぬ心の傷を切実に置くことではなからうか。必ずしも、このような図式的な考え方で言いつくせる訳ではないが、その傷の表白は抑えられ、底層に沈められる程、訴える力は強いといえよう。言わずして言うという俳句の基本的な性格はそこにある。

楸邨先生の俳句は、昔、人間探求派と呼名をつけられたことがあるが、そうした呼名は短い期間で移り、その流れは社会性俳句をへ、造型俳句へと移った。呼名の変るごとに、

「人間探求」という大切な本質が薄れ、あるいは素材主義に陥り、あるいは観念的抽象的試行に移行した。それらがおびただしい追隨者の模倣によって、大河をなし、一種の技巧句となつて類型化し、今日の俳壇の隆盛をつくつていいると言えないであらうか。

私はこうした考えから、「人間探求派」の伝統の正しいありかを、今一度現代の社会の中で再現し、俳句の中に生きた現実の人間が住むというもつとも正しい俳句の基本に立ちかえるために、このたび親しい仲間と一つの俳誌を創刊することとした。楳邨先生のご理解とご援助を頂いたことは申すまでもない。新誌「陸」は従来の閉鎖的な結社でなく、自由で開放的な勉強集団としたいというのが、私の願いである。純粹に俳句を通して、作者の自己追求のきびしい試練の場としたいと思うのである。

(「毎日新聞」昭和48年6月3日号より転載)



新俳諧 一 口癖

句作りになるとするとあり

(赤冊子)

「句作り」は感じとつたものを句の形にまで高めて表現するはたらしき。「なる」は感動が自然に句にまで発展してゆくこと。「する」はとりたてて句に作ること。句作りにはこの二つの方法があるが、自然に句になるためには、日ごろの修練を怠らぬことが肝心であり、またすばらしい作品ができるようにするには、それまでの並々ならぬ刻苦勉強が必要であることを示唆している。この文章の前に、「物の見えたるひかり、いまだ心に消えざる中にいひとむべし」の条があり、感興のひらめきが眼前にあるうちに句形にまでまとめあげてしまふ者——すなわち速吟型の人と、句の表現にまでおいこむのに苦しみ悩んで作る者——すなわち遅吟型の人とがあるが、しかし速吟できるようになるまでには、よほどの名手でない限り、句の鍛錬をしなければ格調高い句はできないといっている。去来も「答許子問難弁」の中で、「趣向と句作りと、前後を論ずべからず、句にのぞむに到りては、感唱する者は趣向をのづから有り、苦案するものは先づ趣向を案す。趣向やうやくいたりて、句作りを思ふ」と同じことをいっている。「赤冊子」は芭蕉の高弟土芳の著で、白冊子、赤冊子、黒冊子の三つをもつて『三冊子』といひ芭蕉の俳諧観をうかがう絶好の書である。

暑き日を海に入れたり最上川

芭蕉

(抄)

爪織り

中村路子

椿織る爪やはるかに父と母
一糸織る一音冬の去りゆく日
如月や織娘に伸びる帯の寸
寒水に横糸緊めてつづれ織る
雪夜なり機に休めし金襴紗
冬と春近づき離れ箆の音
高僧の袈裟の金欄ささめ雪
凍鶴の黙織り上げし老匠は
爪織りの爪や家路の赤手套
次の世へ遺す爪織り春の星



特別作品

地獄絵師

中村和弘

肉を提げ朧夜の橋ふと恐る
鯨の血や細目ばかりの島人等
花椿暗天塚の雑木より
闇の神父へ松の芽楚々と従へり
砂のごと空気が流れカミュの夏
雪解田を太郎の風がころがれり
炭酸色に少年の息山桜
青嵐毛語録下にふぐり見ゆ
青嵐みんな反り身の地獄絵師
青嵐弾痕見つむ埴輪の目



特別作品

作品 I

大寒の潮風のぼる餅を搗く

麦踏の沖より昏れる遊女の墓

つらなりて言葉吐きだす冬銀河

浅見 あさみ

法要に来るだけの故郷焼公魚

喪へ急ぐ観梅列車の片隅に

濃きすみれ終日握り卒業す

銅貨二つ形身の外套より出でぬ

飯田 旭村

鯉のぼり矢車囃すたび応ふ

鯉のぼり天の梁にて止どまれる

長溜息して鯉のぼりもう昏れぬ

矢車の日没あともまだ囃す

石黒 孝子

父逝し夏来る魚拓の鱭かすれ

新雪にカインの暗さ負い滑る

海と空が青く反り合い梅蕾む

悪しき日は辛夷の汚れ空に満つ

麻田 すみえ

末黒野や生木の柵の樹脂つかむ

春陰や裏扁平に喪の花環

菜の花の畝蹴つて矮雞闘つくる

地凶に無き野川にうつり忽忘草

浅野 道風

大寒の蛤ひらく影法師



市川 這児

水取や今宵松明昇かむ垢離

蕨餅練る音奥のくらがりに

修二会の紅椿手に和上たり

脛の出る紙子修二会の僧揃ふ

岩 本 真紀郎

鉄くさき枯野の端が萌えにけり

魚売りの荷台をとめて花の下

花冷えの暗い鏡に写さるる

雨雲へ木蓮白く炎えており

稲 村 茂 樹

発病の日過ぎて退屈桃の花

病む事もなく夜桜を妻と子と

菜の花を一輪差したる絵のコップ

曇天に大きな中心花辛夷

上 田 多津子

節分や海へこまかき石の段

髪剪つて節分の夜の糸を繰る

空壇の底のふくらみ風邪の街

桃の日の舌にひやりと体温計

内 山 寿 子

夕桜愁ひ顔なるこけし選る

若草の土がへだてる棺の兄

旅立ちや重なり合える落椿

笹鳴きや女等喋る喪の厨

太 秦 女良夫

男運薄き耳たぶ霜焼けす

首吊り雉の嘴重き壁に春

引越しの荷に軽やかな蝸牛の殻

散り残る一輪の艶寒椿

大 賀 美代子

厚き雲柿の花踏み髪を拭く

箱根路の肥満児に寄る黒揚羽

命名の紙を柱に夕涼し

黒猫の尾を長く舐め夏終る

大 塚 青 爾



冬日の中子の服を編む狂女のごと

犬ふぐり午前の空が密集する

妊婦の卓尾に充血の焼き鱈

空あふれ深海色の木の芽たち

大堀 鈴子

昼休み作業衣で画く梅林

春の雪薄紙に透く朱塗椀

春浅し塩盛りである百度石

新婚の赤き鍋買ひ風花す

岡 格子

筒簀白等周辺透きてひしめく無縁仏

山門を男下り来て桐の花

みせばやの四五葉となりて梅雨はじく

門小屋に藁の匂ひの菜種梅雨

岡 崎 ゆき子

遡る天童梨花の明暗に

桃さくら信濃の入り日すつと消ゆ

肩抱きあふ道の神あり無限の芽

天翔くるもの見つつ越ゆ芽木峠

加藤 杜郷

いぬふぐり咲きいぬふぐりありと知る

庭手入尻にて沈丁の花降らし

ちるさくら拾いし子犬また棄てに

乙女椿の今年始めて赤咲けり

蒲 生 貨車夫

シャボン玉離婚吾れには照る日無し

憲法の日や薪のみみ貰つて焚く

残雪や車軸陽の目を見ずに老ゆ

駆ける貨車メーデーの雨集むごとし

木 下 弘子

ひとり旅白靴ぬらす北の海

山の湯は晩夏つま先をよく洗う

野ざらしのソファ―曼珠沙華に囲まれて

梅干の香に過ぎし恋雨新らし

木 村 窓遊子

春寒を啄ばむ音す出湯の裏



隠れ家の夜明けをのこし椿落つ

階仰ぎひらく遍路の皺ひかる

まゆ倉の壁うすぬらす春の霧

木村 三男

人の死へ七日加えし花あんず

にはとりが春の夕日と知りて見上ぐ

恋終へて猫が帰り来煙草屋へ

やはらかに夕刊が来し彼岸寺

銀林 晴生

山眠る迎れば暗しけもの道

丸木英術館

綿虫無限胸中に燃ゆ原爆図

火葬のごと紅梅の空萌えあがる

母埋めし裏の杉山雪解けて

小菅 白藤

芽吹かんと高原の樹々陽を吸へり

高原を覚ます一本の花辛夷

つゞく嶺の雪に辛夷の花まばら

水芭蕉おとこの足が地をいため

小竹 ヒサコ

風花や盲いし鹿の肌光る

老農夫赤布を裂く麦の秋

炎天のやどかり人に見られおり

熱の子に合歡の風来よ待合室

近藤 八重子

峽晴れて仕出し屋が入る梅の寺

笹売りのざる初蝶の黄を点す

春浅し河原に炊ぐ水乞わる

花冷えや割りし玉子に血の走る

斉藤 悦子

去年の日を父母に負わせし莓の斑

夏の蝶羽根傷があり禁止区域へ

アカシアの花燦々と夫と行く

アングラの劇跳ねし秋のつべらぼう

白鳥 峻

藻に墜ちし蝶の白さの流速なり



手の届くところに星や木葉木莧

風とはるかに子が踊りゐる盆太鼓

海女昼寝むんむんと青き藻が干され

鳥羽湾 登志島 鈴 木 転 石

畑一枚あらぬ漁村の冬の暮

酔海鼠のこりこり島の女踊る

春の雪真珠筏に鶺鴒か鳴ける

波の間に鶺鴒の鳴く声や春の雪

須 藤 三 柳 子

水の影ひたぶるに澄み風の葦

さくらの下熔接ガスが焔を噴けり

さくら揺りちらして父に遠くをり

葉ざくらに疲る川波はしるとき

逆光の人 田 川 信 子

木枯や同じに巻かれ道問えり

荒東風に束なす手紙とり落す

節分やおそき勤めに坂多し

朝々の菫の色に戸を繰れり

竹 内 実 昭

山苞に石南花の艶胸痛む

鸚哥の口弦弾く女の小指に似て

ジーンズの膝まくりする田植歌

はたたがみ原生林にすいこまる

田 中 正 能

昼の月むかし嗽いし礮酸水

昼の月むかし慕いし貌に似て

聰明な耳朶ありありと綿虫に

綿虫や耳朶温き色めがね

土 倉 靖 子

芹摘みし包みの湿り子に帰る

遠近に畦焼く煙母を訪ふ

いさかいの親子にまぶし白木蓮

三十年振りの友と友訪ふ河鹿鳴く

遠 山 弘 子

老斑やこの麗日をこもり読む

静かに強き教会の鐘朝桜



囀りが受話器を溢れ呼出し待つ

桜まつり売り切つて田楽の火の始末

中村和弘

春蟬や耳の地獄を迷いだす

鶯の青沼ばかり苦しくなる

近眼の土筆つぎつぎ歩きだす

春潮や素手さかのぼる叫びかな

中村路子

どの旅のさくらか錆びてノートより

伝言板手荒く消されさくららの夜

他人の髪結ふ流水の岸より来て

新しき教科書匂ふ雪野のバス

西山葉子

桐咲くや遠い山脈濃き且

老鶯や指呼の彼方の畝傍山

細月へ白さを捧げ薔薇はぐる

雨季の月河口は冷凍倉庫の灯

萬愚抄 (一) 野間郁史

噴水の虹やさくらに髪なびき

萬愚節夜は香をかぐブランデー

おぼろ夜の緋鯉口ひげたしかなり

日曜の讚美歌重し木の芽雨

萩原正章

稚魚隠る真菰の芽影短かすぎ

蝌蚪を底に沈めし顔も底にあり

堀の底浅し蝌蚪らは雲と棲む

雨に頭を垂れて香失せりリラの花

長谷川はまの

蠟染めの鱗よく走る花の冷

風ぬくし戸車替えて戸がはずむ

何の芽か思い出せずに踟みおり

池浚う一と冬越せし鯉重し

平井呈一

黒南風や漁師は骨を砂に埋め

この中に赤軍派は居ず蟻の列

蝸牛や終の栖は我もなし



すぐ剝げる女の嘘よ青鬼灯

平 沢 美佐子

咳の間の桃ちりぢりに散乱す

熱のぼる午後の囁り錆色す

桃花盛りガラスの中に己れ籠め

萌え初めて屍ゆくべき道真直

平 松 荻 雨

ストに入る機関車の前穂わた飛ぶ

春暁の赤旗構内の貨車無言

糊が手にねばつく春斗のビラ剝す

職場離脱者のうた声夜の霧が消す

平 本 微笑子

馬具店の春燈揺れてなを戦後

花冷えの仁王紙つぶて鼻につけ

都忘れをコップ石川五代文学館に活けし文学館

夏怒濤赤丸谷見て来しばかり

町 山 直 由

名刺裏地図の小川に榛咲けり

春あけぼの豆腐屋が使ふ水の艶

青桃の雫に朝日とびつけれ

桃は実に巣につく鳥の眼のひかり

望 月 火沙直

うたたねの紅木瓜にさめ世があらた

ひと日の陽残身白き夕つばき

壺の中地獄は見えず秋の風

ハワイは近く明治は遠く夏期休暇

森 龍 子

墓地裏にモーターが建ち枯野尽く

掌の馬酔木軽しと思ふ別れかな

バス停のほとり光れり蝌蚪の水

初蝶のまぶしき塀に水の影

渡 辺 たけし

落の蓋煮る香額縁買いに出る

野火跡の峻線に遠きマンション群

雪の峠越え来し山女食膳に

白蓮を透けて隣りの紙燃す火



作品 II

浅井あい子

稲妻や夫につく嘘たじろげぬ

癌は生きもの夫も生きもの黄落期

夫の骨大地に還す斑雪富士

安藤しげ子

廃校に裸婦の落雪寒椿

マチックで眉を画き足す母の雛

茅野枯れ替女顔洗ふ甕の水

石和英子

節分やアンデルセンを孫に読む

節分や鬼まろびくる夜の道

もろくの事ありし家こいのぼり

石井よし子

廁土間物の音していと這う

年の暮すり切れ箒の清掃夫

冬雀残る熟れ柿食い落す

岡田刀城子

黒揚羽レグホン癩を丸らす

ペリカンの嘴に落花の水溢る

牡丹のうつろいてより鸚哥病む

岡田富久子

炎ゆるもの持たず陽炎見てゐたり

詫びられて笑顔繕ふ花の冷え

終の句に春月が身を吹き抜くと

小原加津子

バーベキューへ夜露降りたる老夫妻

ロープデボルテに手袋長く若やぎぬ

デザインの本を片手に墓詣で

小原敬恭



ふりあげし真鳥賊の汐の燈にとゞく
いさり火にたわむれ遊ぶ鳥賊子群れ
山なみの緑に聞え牛の鈴

加藤 洋

卒業期トランペットをまはし吹き
寄せ椅子の野火臭く果つ女講
歎異抄拾ひ読み燐飼ひならし

北村 光威

踏の躰此の谷の空抜けられず
真直ぐな父たりしのみ梅真白
木瓜燃ゆる我が青春は戦なか

小宮 淑

五月晴島と思えば四国なり
宮島の緑濃くあり能舞台
未知の旅蓮華の中に我を知る

五味 時子

初茜早や嫁が水流す音
家毎に盆梅育て機町
雑木山子の画用紙に緑濃き

桜田 篤一

ねぎ坊主旅の二日に並びをり
旅に来て黄色く暮れし菖蒲宿

旅了へて石見の海や若布漁る

志賀 重介

海沿ひの田に鵜が降り来田植前
虎杖に埋まり海向く海女の墓
沖盛りりて湾の色濃き五月かな

渋谷 よしを

新緑の厚さくゞりて吊橋へ
農学校へ直角にくる青田風
宝物館のすぐ裏の畑茄子を植う

菅原 和子

グラチオラスナイフの如き芽を揃へ
子かまきり犬に嗅がれて体揺らす
出会いたる蜥蜴は土に息荒く

田嶋 小枝

天草や暮春の海の藍極む
徂く春の海を見つめて人忘る
大阿蘇の遅日のパスの子守唄

寺内 一砂

四ッ角の婦髻少さし春疾風
春昼や掌に載せて売る小盆栽
枝折戸は紐で結んで牡丹の芽



当山りん

曲折の涯の花かや母病める
花冷えの花に疲れし京の宿
満ち足りて老の空腹五月晴

中沢余政

土筆芹すぎて華鬘の群れ咲けり
華鬘草土竜の土に埋もれけり
咳こぼし手もて押へつ遍路ゆく

野地堯水

四島昇城
柳萌へ佃煮大店梁太し
佃煮包みるる春澗を漕ぎ来し手
春の灯を水尾に荷船の寝に帰る

長谷川まさし

犬鷺の檻にありても岩に行つ
ぜんまいを揉む手休めてハガキ受く
山桜散りし棚田を巡りけり

林ゆき子

火取虫連れて屋台を曳き帰る
箸の先トマト重しと病父云ふ
通り雨曳荷の西瓜輝かす

樋沼幸枝

麦青し亡父の聖書に酒の汚染
暗渠となる岸辺の桜散りしきる
地下道に表札を買う菜種梅雨

平野謹三

夜学果て蛙に闇を渡しけり
父が植う杉の向かふの海の音
夜学の耳蛙に奪られとられをり

松井都

リトマスやまるい顔して卒業す
春暁や疼きの中へ夫もどる
路の鬘父の顔もつ女親

谷田川稗象

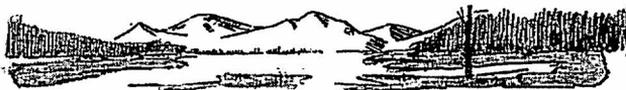
妻と牛乗せて漕ぎゆき春はゆく
廃船の捨てあるところ行々子
鈴懸けの木の梅雨空を塗り直す

山内愛

素足より冷えのぼり来て牡丹閉す
牡丹散りて青める午に一人あり
トランベットのひびき地に湧く落椿

山内晴夫

よろずやの束子に隣る干鏝



亡き祖父の涙とも見ゆ露の露
烏賊釣る火遠くに竝び祖父の墓

皆川 桂子

みちのくの石垣染める芝桜
浴衣縫う褐色の指わが母か
舞い終えてバス停に見る臘月

宮崎 司

有明の干潟果てなし春の月
青袴揃えて映へる花菜畑
青に白二色刷りなる忘れ霜

渡辺 凍虹

穴一つ馬刀貝一つ汐吹きぬ
雨の昼リラの匂いのすぎとおり
牡丹咲くと息はづませる男かな

綿貫 和子

早春や童の頬に泥の跡
入学式へ桜の花と語り合う
幼な子が土に描きたる鯉織

米沢 秀子

三ヶ日過ぎて焼いも屋の太き声
松取れて元の家族に戻りけり

雨戸繰る柔しき増しぬ沈丁花

青木 康子

寒木瓜や口重き娘の部屋に濃し
寒椿の蓄喰む鳥空くらし

大川原 巻児

柳絮とぶ光りへ光りふり返る
タンポポの茎や朝焼け走り出す

右高比 佐夫

猫抱いてしぐさ母めく日向の児
千枚田つなぐ畦道木瓜の花

大山 藤陰

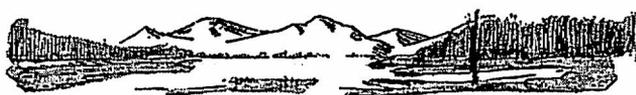
篝火に舷側たゞく鶺鴒かな
木曾谷乃夜明けを鳴くや春乃鳥

小野 浩人

麦三寸歩む畦道故郷なり
初蝶や天地ぬぐもり河越えて

鏡 千枝

能面のまなざし蹤きて春の宵
たかぶりは火を消してなほ春茶会



桂 茂子

綿かぶるぜんまい鉢にそだてけり
進学祝旧約聖書娘に約す

高山千秋

種まきし庭に春雨はげしくなる
ふるさとのごと咲く峽の桐の花

畑山しげみ

火の山の火を見るごとし花仙人掌
つまだちて斗う鶏や額の花



〈陸〉東京句会のおしらせ

酷暑の折柄、みなさまには御健吟のことと思えます。
田川飛旅子先生の熱心な御指導と、みなさまの御協力
により、毎回、盛会が続けております東京句会も〈陸〉
発刊を機会に、従来より更に広い会場を、遠山弘子さん、
近藤八重子さんの奔走により確保いたしました。
新宿、渋谷から交通の便もよく、広く涼しい会場を使
って、いっそう充実した心楽しい句会を進めて参りたい
と思えます。第四日曜の午後の一と時を、みなさまお誘
い合せの上、お出かけ下さい。

場所 オリンピック記念青少年総合センター

研修棟 六〇一号室

(渋谷区代々木神園町三番一号)

電(47)七二〇一

小田急線 参宮橋下車5分 旧オリンピック村

京王帝都バス 新宿西口16番、渋谷西口14番にて

「代々木五丁目」(青少年センター前)下車

地下鉄千代田線 代々木公園駅下車8分

日時 八月二十六日(日) 午後一時

幹事 遠山弘子他

陸路集

田川飛旂子選



花冷えや首級めく夜の菩尿瓶
咳一つ転がす傾斜蓬摘む

東京 伊藤ましを

羽のごと胸部写真を抱え春

相聞説く教授に白き牡丹照り

仙台 柳谷とし子

矢車の花首あげ来る梅雨の卓

夏がらす瞳の金色は怒りをり

知らされて復活祭の空仰ぐ

尾花沢 大類つとむ

見上げれば夜桜音のないフォルテ

祭りのごとく凧上ぐ春の甲子園

土筆つむ幼な子の輪に交りたり

習志野 石浦 宣栄

紅梅の蕾濃くなる雨のあと

梅の日に朝の芥を括り直す

我孫子 鈴木梅陰居

坪躰ひの葉を刈る主婦に風光る

子と素足で鮎を釣る沼風光る

夜々おそく疲れ帰宅の道余寒

榻に乗りし椿向き変ふ風の中

かく美しと白玉椿指されけり

祠樹いつか赤き椿を湖へむく

戸板敷き少女が売れる花の種

東京 東 由珂

春泥の乾きて堅きズック靴
菜種梅雨六十路となりしクラス会

八千代 清水 侯鳥

咲きみちし花に鰯口鈍く鳴る
 散るさくら笑ふ埴輪の目の形
 春泥や送らるゝ灯の輪の中に
 柿若葉映して主婦の長話し
 給食の鱒は病者と睨み合う
 夕暮の墓石に踊る柿の花
 病廊に朝光射し来五月疾し
 万緑の中なる病者敗れまじ
 新樹映ゆ列島状なる水溜り
 枝長く垂れて芽吹けり夫癒ゆる
 遠き娘に買ふセーターの強き赤
 嫁がせて寒さ増したる厨かな
 冬雲やクッキー売の修道女
 春立つや裏打したる鯨尺し
 辻地蔵目のやさしさや木の芽雨
 五月閑耳鳴りてやまず片肺の私語
 看護帽の君のやさしさ初蝶とめる
 片肺のいのち五月の炎抱く
 嫁菜摘むふるさとの風手許にあり
 音といふ音の弾みて五月来る
 念仏講新茶の香り立ち込めり
 土蔵に打つ医者看板桜咲く
 海みるや桃咲きはじむ観音寺

東京 新井 米子

池田 孝

泉谷銀玲子

磯野 水穂

岩原 初恵

うとう 淳

大木野生女

宮原 佐和

花散るやピアノの音のよくとぎれ

一人居の大きすぎたる冷蔵庫

書を伏せて雷去るを待ちにけり

花の屑掃き寄せてある根のまはり

春めくやのみ忘れたる風邪薬

啓蟄や髪梳く病女のうすぎ胸

春がすみ鳥鳴かずして人の声

地下足袋の並ぶ飯場のサイネリヤ

閉園に人も牡丹も疲れをり

旧街道石畳へり著莪の雨

きらめきて春陽鋭し注射針

花の雨けふる夕べや蝶鈿のさび

噴火口見えて山吹山つつじ

春雨や切株と居り傘の中

春一番光の中へ兎が走る

ゆくえなきピエロに街の福寿草

秘仏見にユツカの匂ふ無人駅

薫風や廻廊渡る緋の僧侶

セーターを手さげにくくり牡丹見る

鉄やさしくする炎が梅雨のくらがりに

父の日のいびき嫌われいたりけり

癩疹の子雨のこでまり地に触れて

八朔をむく病弱の爪の反り

東京 宇留野止青

加藤富美子

木上よし江

国井 胡山

桜庭砂鬼男

真田 佳江

竹山 爽子

谷口 恵子

言い合へば胸痛む癖花の雨
版画彫る窓少し明け春の月

妻の掌の細く濡れるて薔薇を剪る

牡丹や売血の過去伏せとほす

走り梅雨壁の写楽の笑ひをり

母居ぬが普通になりてぬた作る

新若布ウド白くして味噌辛し

踏青く煮たし亡夫の好みたる

大文字の聖書重たしイースター

連翹や菜の花が好きたんぼぼも

青き踏むりハビリテーシヨンの患者たち

いさかいの二人が苺つぶして

ピカン逝く花はひつきりなしに散る

結婚の通知や枇杷の実の育つ

雨雲や一段低く夕桜

よろめいて飛ぶこともあり花の蝶

花吹雪く吾れは退院又のびて

春晝やそれだけが射る芽の感覚

高ぶる花の散りゆく時も一閃す

来し方に桜の花の闇の闇

山百合や野良着に花粉少しつき

「休もうか」母うなずきて花水
昼寝人用思い立ちむくと起き

東京 中村 三冬

藤浦 妙子

前野八千穂

松橋 流石

室井 晴子

森 ときを

山岸 明子

佳き目覚め籠も若葉も日を透す

照り翳る若葉主治医の命日来

芽木充たし懐あさき病舎裏

芽吹かぬ木芽吹く木猫が走り出す

こぶし咲いて信濃はみどり兆すかな

樺芽吹く夜は標高差感じをり

石路の花燈籠の頭は欠けしまま

苜蓿に坐す今日よりは父母の墓

今日より明日の思案断ちたり蟻地獄

「光化学」花もふるえて涙かな

花あれど葉きょう老女ふりむかず

花々のふみつけられて道はるか

朴大樹のてつべんの花見おろしぬ

川崎民家園にて 二句

嫁の座の板光るのみ菜種梅雨

板の間は鏡色して白菖蒲

身障児声変りぬて桃ふくらむ

友に会ふごとく木蓮の白開く

連休や金魚ぶら下げ夫婦る

一人居やこぼれんばかり青木の実

芹茹でて寐たきりの母見舞ひけり

菜種梅雨猫の貰ひ手無かりけり

一もとの青葉の中の遅桜

東京 横山 薫

神奈川 田倉 黄波

藤沢 浅見 玲子

しろまゆきこ

鎌倉 藤島 久代

茅ヶ崎 志賀とみ子

松坂しかえ

浜松 古橋 英松

藤茶屋の色のあせたる赤毛布
盛りがちな庭隅につつじ燃ゆ
みとり妻ねむりて花の外科個室
春雷のはげしき日なり糸抜かる

手術前は六分咲きの桜なりき

試歩三步四歩五歩さくらすてになし

創刊のしらせありたれば

臚にて封きる予感あたりけり
盆栽を湧きおびやかす春の蟻
春山鳩親にかへせの言葉かも
葱坊主海のしらべを聞いて居り
庭長閑造り算が石叩く

駅遅日土曜日顔並びけり

白木蓮の咲ききらずして風の中
走り茶に一茶の匂ある湯呑かな
沖晴れて白南風桐を咲かせけり
振られても襦袢にむらがる目高かな
有線の浪曲春眠破りける

諍いの後の虚勢や椿落つ

深みどり菖蒲の花は未だ咲かず
更衣して旅発てる妻若し

花曇り予防注射の犬連れて

春潮の渦巻く極み鬼鎮む

滋賀 町田けんし

大阪 池田 久馬

姫路 堀 鳴水

福山 梅田 康人

岡山 土居貴美子

碧南 杉浦 三鶴

長崎 近江 淑

せせらぎや廃車のめぐり草萌ゆる
野いばらの切通し行く緋のコート
なんきよくのりくをもとめる富士の意気
共産の旗も目にしむ陸の色

扼く警備政治軍備の陸続き

風寒き四月康成忌をむかう

たんぼの黄に染み蝶は羽たゝむ

夜桜や万朶となりて胸に燃ゆ

うつそうと老桜の下土器掘られ

葎深く度まし乙女椿とて

新芽噴いて鳥語はなやぐ大樺

花ふゞき馬で嫁したる祖母想う

連翹の黄緑にかわり雨多し

児童画廊心よき絵に青葉風

さつき園指話の巫生等嬉々として

雑草を抜く手に蟻の這いのぼる

ジャム作る指を染めたる母かな

生真面目に一句欲しさの薔薇を見る

初夏の朝新婚の荷が届きけり

ときめきもありてみずきのしたで待つ

路地裏に夏おいてゆく金魚売り

この瘦せにまた夏負けの加りぬ

遅れしを待つくらがり蚊を憎む

福岡 石橋 熊吉

宮城 石川 蒲公

山形 伊賀光三郎

丹野 汀石

茨城 久我 好

東京 大西 恭助

清水 芳子

増田 照夫

吉田 義子

浜松 高木 国雄

選後評

田川 飛旅子

花冷えや首級めく夜の蓄尿管 伊藤ましを

選者も昔一カ月ほど病院に入院した経験をもっているが、病院の便所に並ぶ患者用の蓄尿管ほど異様なものはない。量や色を異にした病者の尿が、そこに苦惱をたたえた生き物として存在する。選者は八田川博氏の蓄尿管へ寒く尿るVとその蓄尿管に貼付してある患者の姓名を、私自身から離れた別個の存在と感して一句をものしたことがある。この作者は、同じような病者としての切実な感動を、「首級めく」という表現からかちとろうとした。無気味な、生き物めいた、患者の苦渋をたたえた蓄尿管の存在へ、ある程度肉迫しているといえよう。俳句では表面をなでて、うわつらの説明をしようとしないうで、錐のように、その本質の中へ垂直降下してゆかなくてはなるまい。

散るさくら笑ふ埴輪の目の形 新井米子

心を打たれた句の一つである。落花の形を地上に見ていて、これは何かの形に似ていると作者は何かを思い出そうとして長く考えたに違いない。そのとき、はっと、あっこれだと心の中に蘇ったの

が、普段、自分の身辺に置いていて親しんでいる埴輪の目の形だったのであろう。そういう、アツと思う、阿吽の呼吸がこの句の上句と中下句との間に存在すると思う。そして並べられた二つの対照が、即きすぎない点が良い。私は俳句は配合の妙に結局は帰すると思うのであるが、その配合される二つのものの関係の微妙な意外性が新鮮な感動を喚び起すと思う。

給食の鱻は病者と睨み合う 池田 孝

病院療養者の句である。余り食欲のありそうにも見えぬ患者は、前に出された給食の皿の上の鱻をもて余し気味に見ている。その真面目な光景のなかにあるユーモラスな表情こそ、俳句の一面ではなからうか。

遠き娘に買ふセーターの強き赤 磯野 水穂

この句の「強き赤」という強いタッチの表現に、私は心ひかれる。遠方に住むゆえに一層心の通う娘に対する愛憎の表現として、この「強き赤」の突っこみこそ、そこに作者の人間を、表現を通して俳句の中に住わせる営みといえないであらうか。

音といふ音の弾みて五月来る 大木野生女

リズムミカルな句である。春の到来にわくわくしている作者の気持ちが、「音といふ音」という表現に滲み出している。

照り翳る若葉主治医の命日来 横山 薫

患者の方が先に死ぬきためを持っていると確信させられる主治医

と患者の關係。それがひっくり返って主治医が先に亡くなったのであるから、患者にとつては印象的である。命日までしかと憶えているのだが、その日が若葉に射す日が強い照り翳りを送って寄越す頃によつて来たのである。軽い意外性を備えていて心憎い。

春雷のはげしき日なり糸抜かる

町田けんし

手術の抜糸の日にはげしい春雷に見舞われたという作者の切実な体験が美事に表現されている。「春雷」と「抜糸」という二つの全く無關係なものが、作者の経験の中で稀有な出会いをし、他人の想像も許さない詩としての結びつきをしている。「はげしき」という言葉が、この二つのものつなぎをしつつ、同時に作者の心の動揺のさまを伝えてゐる消息も見通してはならない。

臚にて封きる予感あたりけり

池田久馬

前書に「創刊のしらせありたれば」とある。私は勝手にこれを「陸創刊の」と解釈をして、作者の温い気持ちを感じをもつて噛みしめたのである。創刊をしらせる通信の封を切る前に、作者はそんな知らせだろうと予感をもつたのだが、果してこれが当たっていたという。それだけだと、この内容はかなり散文的なのであるが、作者はそれを詩に高めるために、「臚にて」という季語を斡旋する用意を忘れなかった。

春潮の渦巻く極み鬼鎮む

近江 淑

力強く特色のある句である。作者は春潮が疾く渦巻く瀬戸にあって、長くそれを凝視していたに違いない。その渦巻きの中に何か作

者の心に訴え来るものがあるのを、表現の形となるまで作者はじつと獲物をまつ獵師のような鋭い眼でみつめたに違いない。そんな懸命な努力の果に、作者は「極み鬼鎮む」という、かなり観念的、象徴的な表現に辿りついたのであろう。こういう風に、作者は一つの表現をうる為に、安易に類型的な出来上った表現を拒否しなくてはならない。

遅れしを待つくらがり蚊を憎む

高木 国雄

逢曳の情景であらうか。男は女に待たされてかなりいら立っている。そうした状態にいる男の心理を表現するのに、「蚊を憎む」という把握は鋭い。そして普通の人なら、そうした心情的細微をふりかえってみることはないが、蚊の声まで憎らしく思うように荒んだ自分の心を反省しているところが、如何にも良心的な詩人の心であると思う。「蚊を憎む」という詩句なども、作者の人間が俳句の中に生きて棲みこんだ例といつても良からうか。

知らされて復活祭の空仰ぐ

大類つとむ

日本人にはキリスト教の基礎的な感覚がないから、一部の信者を除いては、復活祭といつても実感は湧かないであらう。この作者も「知らされて」という実に卒直な導入部を設けて、異教徒として改めて、復活祭の日の空を見直している姿勢がよく出ている。俳句は短い詩型であるから、こうした珠玉のような表現があつて始めて句には生命が賦与される。「知らされて」は実にウブで卒直な青年の息吹きが匂い出ている好ましい。

編 集 後 記

恩師加藤楸邨先生と畏友安東次男氏から、創刊を飾る文章を頂いたことを切に感謝する。熟読玩味願いたい。終末を思わせる現代に生きて、今後俳句を通して、ひたすらに生活者の訴えを成就してゆきたい。

(飛旅子)

を全人間的に高めることができるとしたら……。今言わなければならぬものを内側に秘め、そこから物象を発見し、新しい詩感覚を磨き出していく過程において、自己の精神の比重を確認したいものです。

(K・N)

俳句の創作をおして自己

李白は詩を作ることを重大

な仕事と考えて、単なる慰みとしてはいかなかった。△陸▽がどのような雑誌になるか、会員・同人ともにそれぞれの目標はあると思う。

主宰の「氾濫する俳壇に更に一誌を加えても意味はない。広い眼で俳句を見つめたい」という言葉が印象深い。

(青爾)

陸 第一卷 八月号

昭和四十八年七月二十日 印刷
昭和四十八年八月一日 発行

発行人 田川飛旅子

発行所 陸 俳句会

〒164 東京都中野区上高田二丁目三

電話 (東京) 三六八〇五八番
(〇三) 三六八一二四二六

印刷所 大昭和印刷K・K
価 丁共 三〇〇円